
英雄の唄

GATS

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

英雄の唄

【Nコード】

N1753D

【作者名】

GATS

【あらすじ】

王による支配は廃れ、宗教による支配は打倒された。腐敗は燃え散り、英雄達は名を残す――革命より十年の時を経て、急激な経済成長の時代を迎えた大国・アマデウス。鉄道王が一国を動かす力に手にし、かつて隆盛を誇った宗教家達は没落の果てにテロリストへと堕ちる。成長と混乱の織り成す混沌の中、出会うは貴族令嬢と異国の剣客。彼らは歴史の闇に消え行くか、英雄と歴史に名を残せるか。

「最初ノ前振…今宵の月のように」

闇を照らす炎は無く、全て黒に塗りつぶされているはずの風景が淡く白く光っている。

古来より月光は魔性を惹きつけ、人の心を狂わせるものだと聞く。

陰陽道だの鬼術だの仙術だの一介の剣客には良く分からない領域には普段からあまり触れないし興味も沸かないが、こんな夜には確かに鬼や妖怪が月の光の影から顔を出すのだろうと思う。

だが此処は鬼も恐れる―というか鬼も殺せる手練手管の猛者が集う柳瀬圀破流剣術道場、物の怪の類が訪れるとしたら、この町の事情も何も知らずに月に照らされ淡く輝く玉砂利の庭に佇む若武者と老剣士を食らおうとやって来るといのが妥当なところだろうか。

しかし、もしそんな物の怪が存在するのなら彼は不幸というか迂闊というかやっぱ不幸であるとしか言いようが無い。腹を満たそうと庭に忍び込んだ瞬間に首を刎ねられ、自分が何をされたのかも分からないうちに首を失くして倒れる自らの身体を見ながら闇へと沈んでいくだろう。

「なあテツよ」

「なんだ爺さん」

「お前さんは、自分が何をしようとしてるのか分かってんのか」

「ああ」

「それで後悔しないってのか」

「ああ」

「圀破流を捨てても」

「ああ」

「義正は恨むぞ」

「だろうな」

「深澄は泣くぞ」

「俺にも女泣かせるくらいの甲斐性はあったんだな」

「俺も悲しい」

「アンタを最後に持ってくるな感動が薄くなるんだよ糞爺」

「減らず口を」

若武者と老剣士、二人の間の空気が張り詰め、大気を歪ませる様だと錯覚するほど強烈な緊張感が周囲を包んでいく。

人はそれを威圧感若しくは殺気と呼び、死と流血の予感として認識している。

だが二人の表情も声色も楽しそうで、行儀が良いとはとても言えないが彼らなりの別れの儀式とも取れる。

本当に楽しそうで、楽しそうで――悲しい。

そう思っているのは二人共か、それとも一人だけなのか。

「テツよ、分かってんのか」

「何が」

分かっている。『テツ』には老剣士が何を問おうとしているのか分かっている。

それは『テツ』が老剣士に一番最初に教わったこと。

「自由ってのは」

だから、胸を張って

「何も背負わず、何にも持たず、ただ独りであることだ」

答えられるのだ

「…だろ？」

その問いに。

「正解だよ糞餓鬼。鎖に繋がれた獣みたいに睨むだけの餓鬼がよくぞここまで成長しやがったド畜生」

「ここまで強くしてくれてありがとうよ糞爺」

二人の左手は元より腰の刀剣に掛かっている。そして親指が鯉口を切り、右手が柄を握り、鉄の蔵から殺すために存在する反身の芸術が姿を現す。

かたや無名の凡刀。かたや国中にその名声を轟かせる孤高の刀工・村正が打ちし一刀。

『テツ』の目に幾人もの…否、十や百ではきかないほどの人間の血を吸ってきただろう白刃が映る。

あまりに恐ろしい切れ味と凄惨な逸話と共に名刀を妖刀へと変化させた、その呪われた刃には細やかな刃紋が映し出されている。

その白刃が、刃紋が、魔性の光に照らされて淡く光る。

何処の誰かが「村正の刀は斬った人間の数だけ刃紋が増える」などと噂したものだ、今ならそのくだらない噂話を信じる事が出来る。

その刃はあまりに妖しく美しい。このまま斬り殺されても構わないと思ってしまうようなほどに、現実離れしている。だがその美しさは村正だから、という理由だけではない。それは辺りを照らす月光と、目の前にいる柳瀬後胤の透き通るような殺気があればこそ。

齢五十をとうに越え、六十の大台にさしかかろうという老人から放たれるには少々物騒な魅力だ。

だが飲まれない。

囲破流の心構え、何よりも重要なのは「己が精神を乱されないこと」である。

敵が剣豪だろうと將軍だろうと鬼だろうと老人だろうと、己の為す事を曇らせてはならない。

たとえ得物にいかんし難い差があろうと、経験に云十年の差があろうと、見据えるのは敵と己の精神のみ。

ただ剣を握り、構え、敵を見据え、敵の動きを捉え、敵の攻撃を見切り、最速の太刀を、最短距離で、最も有効な拍子にて放つ。

相手が剣の妖怪だろうと難しいことではない。

ありとあらゆる戦況を大小だけで切り抜けるための戦場剣術の集大成、それこそが柳瀬囲破流剣術。

敵が一人だけだろうが大群だろうがやるべきことは変わらない。

「最後に聞くぞ」

「なんだ」

「刀を納めて輝かしい人生を歩む気は無いか」

「派手に着飾るのは好きじゃないんでね、俺は」

「そうか…」

殺気が収束し、目に見えぬ研ぎ澄まされた数え切れない針が、互いの身体を射抜く。しかしその針は互いの身体を捉えることなくすり抜けて消えていく。

『縛り射殺し』の対処法は強靱な精神と肉体で受け止めることなく、風や水のように受け流すことにある。

やがて殺気は数を減らし、互いが構える人斬り包丁へと集まっていく。

「「残念だ」」

あの日の糞餓鬼を。

あの日の糞爺を。

もう見られないのが残念だ。

思い出せないのか思い出したくないのか、この夜のことは朧気にしか覚えていない。ないが。

影の無い月が、やたら輝く夜だった。

それだけは、ハッキリと覚えている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1753d/>

英雄の唄

2010年10月10日03時00分発行